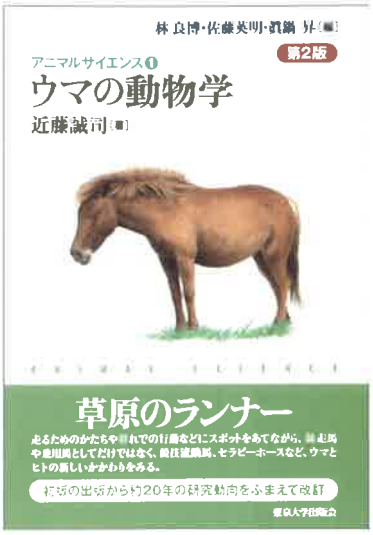
おすすめ書籍
Recommended Books



アニマルサイエンス①
ウマの動物学　第２版

著：近藤 誠司

205 頁
定価 4,180 円（税込）
東京大学出版会　2019 年 7 月刊

●推薦者　浅川 満彦（酪農学園大学 獣医学群獣医学類）

既に、獣医学関係者は周知のことであるが、いくつかの獣医大では国際基準クリアを目下の最重要課題に設定している。私が勤務する酪農学園大学獣医学群でも、欧州が設定した獣医学教育基準EAEVEの受審に向け改革が進んでいる。その準備の中で知り得たが、ウマは伴侶動物の範疇であるとのこと。まず、ウマをブタ・ウシの並びではなく、イヌ・ネコに準じた考えの取り扱いにすること。パラダイムシフトと云っては大袈裟だが、大きな課題であろう。だが、右往左往するのは禁物。落ち着いて情報を集めようと思い立ったが矢先、本書と出会った。この本は2001年に東京大学出版会「アニマルサイエンス」シリーズの一角として刊行され、約20年後の新知見をアップデートしたもので、柔軟化を失った思考修正には妙薬となった。

本文は５つの章で構成され、前半３章は進化と家畜化の歴史、形態と行動など純な動物学的な内容が収載されていた。衝撃を受けた記載は、「草などの繊維成分主体の飼料で立派にからだを維持」しているが、その消化・吸収機序は「いまだ説明されていない」であった（21頁）。私の学生時代から抱いていた、要するに、栄養豊富な糞をしてしまう謎は、現在でも不明ということが確認された。ウマという超メジャーな家畜でこれなのだ。畜産・獣医学には開拓すべきフロンテイアがたくさん残っていることなのだろう。有難いことではないか。

また、前半部にはシマウマが家畜化されなかった理由、モウコノウマとその近縁亜種（品種）の現状、当て馬（試情馬）の役割なども、個人的には興味深いものであった。私自身、モウコノウマをモンゴル調査で目撃したからである。また、（思い出したくはないが）大学院時代、「当て馬のようですまんが、履歴書を出してくれ」と指導教員から云われた。意中の人物を研究室の助手採用としたいが、無競争という訳にはいかないので、競争人事を画策するために、私が応募した形を採らせたのだ。本書で、あらためて、その悲哀が推し量られた。

さて、肝心な伴侶動物としてのウマの成り立ちであるが、これは後半２章を熟読したい。とりわけ、ウマ肉の利用や欧州への騎馬民族襲来の歴史などの箇所を一読すれば、腑に落ちる。なお、私の勤務先の獣医学群には、獣医学類と獣医保健看護学類のコースがあるが、数年後、３番目の学類として、馬術やその飼育管理技術など涵養するためのコース設置が検討されている。私の定年後のことではあるが、本書により得た知識で大いに刺激を受けた。とりわけ、ホースセラピーやブラッドアニマルなどの部分は、専門的な大学としての学問展開も期待できよう。開講が待ち遠しい。

※NJKは、みなさんで作る雑誌です。症例紹介、ご質問、ご意見をお寄せください。